ネットの向こうのキミへ

千紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネットの向こうのキミへ

【Ｎコード】
Ｎ７６９３Ｚ

【作者名】
千紗

【あらすじ】
中１の千紗はネットの向こうにいるクラスメイト陵（りょう）に恋をする。
男女と地味男が隠し持つ裏の性格にお互いが惹かれあう。
そんな２人の青春純愛ラブストーリー

プロローグ

～プロローグ～

学校でのキミとネットの向こうのキミは違う。

いや、違わないかもしれない。

いや、やっぱり何処か違うんだ。

・・・こんなのあたしの想像かも知れないけど。

学校では男女のあたしでもネットでは可愛い女の子になれる。

キミだって、ネットじゃあ、あんなに明るいじゃん。

画面の向こうのキミだけど、見たことないキミの素顔だけど

あたしはネットの向こうのキミが好きです。

これを世の中ではダメな人間としてみなされる行為であったとしても、

クラスメイトがネットでの公然ラブラブだとかでからかってきても

あたしは彼方が好きです。

～ネットの向こうのキミへ～

第1話

「テメェ、ふざけんじゃねーーーーー！！！」

ドンガラガッシャーン！！

机と椅子が教室に散らばり、一人男子が仰向けにぶっ倒れている。
この情景は日常茶飯事。

あたしはまだまだ長いスカート丈が慣れない中学生だ。

男勝りのこの性格に、兄ちゃんから受け継いだ言葉遣いの悪さ。
ミス何チャラでグランプリのお母さんの血を受け継いでるおかげで顔は悪くない…はずだ。
勉強も全国トップレベルだし、男子にモテないおかげで女子から好かれる始末。

あたしこと千紗は何不自由のない、どこにでもある生活をしていた。

「ちょっと！千紗！女子なのに怪我したらどうするの！」

そういって駆けつけてきたのはバスケ部の愛莉だ。
愛莉はボブカットで男子からモテるが、女子からは好かれない典型的な声高ぶりっ子。

まぁ、こんなヤツでもあたしの幼馴染という肩書のおかげで表面上は上手いことやってる。

「いつも見てんだから分かるだろーが。こんなひ弱なやつに負ける

ほどあたしは弱くない。」
「…よくもやりやがったなぁ…。」
フラフラと立ち上がったのはあたしと愛莉の幼馴染の翔。
クソほど背が小さくて、メガネなんだけど、素顔はマジで可愛い。
いや、マジでもう男子とは思えないほど可愛い。
二重で顔が小さくて、まつ毛がヤバいほど長くて！
…超うらやましい限りなんだけど。
「おい千紗！テメェよくも殴りやがったな！」
「うるせぇ！最初にケンカ売ってきたのはそっちだろーが！」
翔が殴りかかろうとしたところに飛び出してきて跳び蹴りを喰らわしたのは和泉だ。
「よぉ！大丈夫？」
和泉はあたしと同じ美術部員で、しかも男勝りな性格をしている。
勿論、ケンカも男子よりは絶対に強い。
「さっすが和泉！跳び蹴り上手いじゃん。」
「まぁ、千紗には負けるけどな。」
2人で肩を組み合っているところにやってきたのは、バスケ部の桃。
「あんたら、どーゆー会話してんのよ。」
桃はショートカットでサバサバした性格で結構男子からモテる。

愛莉と桃は昔からちょっとばかり性格が合わなくて、何度喧嘩になったことか…。

「くっ…。またコイツ等に負けた…。」

「ヘッ！あたしにケンカで勝とうなんて１００万年早いんだよ！」

「うっぜぇぇぇぇぇっ！！！」

翔とあたしはいつものように睨み合いながら口喧嘩をする。

今は６月。

中学生になって新しくなったクラスにもようやく馴染んできたころだった。

ガラガラ・・・・・

「コラー！さっさと席に付けー！」

先生がドカドカと足音を立てながら教室に入ってきた。

あたしは右から４番目、前から５番目の自分の席に腰を下ろす。

「ねぇねぇ千紗！朝自習のプリント、予備ある？」

あたしの後ろの席の和泉が話しかけて来ると同時に次は雄大が話しかけてきた。

「なぁ、千紗。朝自習のプリント、予備ある？」

雄大はあたしの隣の席のヤツでビン底メガネの秀才。

ところがメガネをはずすと、メチャメチャカッコイイケメンで、

どこかの少女漫画か！って感じなんだけど。

「プリントって…これか？」

そういいながら一枚のプリントを差し出してきたのは雄大の後ろ、つまり和泉の隣の陵だった。

陵は普段からおとなしくて…とゆーより、影薄い存在。
頭もいいわけでもなく、悪いわけでもなく、運動もどっちかっていうと悪いぐらい。

顔は悪くないと思うけど…まぁ、好き嫌いのありそうな顔だ。

「おぉ！ナイス陵！」
「あ、あぁ…」

あたしはいつものように少し乱暴にプリントを取り上げると、雄大に渡した。
あたしの予備のプリントは和泉にあげて、ようやく準備完了！
そのプリントには『クラスメイトの趣味を知ろう！』と書かれていた。

「…何だよ、コレ。小学生かよぉ！」

あたしはやる気なさそうに椅子にもたれかかると雄大は言った。

「まぁ、そんなこと言わずにさ、やろうぜ。」
「お前だって、いつ最近まではランドセルだったんだから。」

雄大に続いて和泉があたしを宥めるように言う。
「ったく、さっさと終わらせようぜ！」
あたしは椅子の向きを変えて、丁度陵の方向を向いた。
「なぁ、陵！お前の趣味って何だ？」
「え、あ、俺はその…」
「何だよ～さっさと言えって！」
「…パソコンと音楽鑑賞。」
「へぇ～、何聴くんだ？あたしは基本Ｊ－ＰＯＰだけど。」
「え…っと…日本ロック…。」
あたしは意外な趣味に驚いて考えるより先に口走ってしまった。
「えぇぇぇ！？ロック好きなの！？あんな喚いてばっかのヤツのどこが！？」
すると、陵の逆鱗に触れたのか、陵はいきなり立ち上がり、
「はぁ！？お前はロックの良さを何もわかってねぇんだよ！」
「はぁぁ！？Ｊ－ＰＯＰの方が歌詞も良いしリズムもいいし！！」
「ロックのほうが歌詞はいいに決まってんだろ！？」
あたしにとってこれはいつもの日常ー…
だけど、周りはそうは思っていなかった。
「りょ、陵が…」
「女子としゃべった…？」

「…？どーしたんだよ、みんな。何見てんの。」
「え…だって…陵が女子としゃべったから…。」
あたしは陵の横顔をみると、陵はうつむいたままで顔を赤らめていた。
あたしにとって、男子はただの友達で喧嘩仲間。
その男子が顔を赤らめて恥ずかしがるなんて不思議でしかなかった。
その時からあたしは陵を少し不思議に感じていたのかもしれない。
「…んだよ、陵。気にすんなってぇ！！」
あたしが肩をパンっと叩くと陵は少しだけど恥ずかしがりながら言い放った。
「いってぇんだよ！バーカ！」
「おっ？喧嘩売ってんのか？殺るぞ、おい！」
「殺れるもんなら殺ってみろ！」
「へぇ～言ったな！！」
そう言って、殴りかかろうとしたときだった。
ヒョロヒョロでほっそりとした腕が伸びて、あたしの拳を受け止めた。
「…え？」
「…お前も女子なんだから、喧嘩はほどほどにしろ。」
「やだね。」
「俺に勝てないようじゃ、喧嘩の女王もそろそろ落ちるな。」
「…なんだとぉ～！？」

「おいおい！２人とも落ち着けって！」
「ほら！先生見てるし！！」
雄大と和泉が慌ただしく、あたしたちの止めに入る。
あたしと和泉は小学校からの心友。
雄大と陵も小学校からの心友だった。
この４人が出会ったのは、この中学校の青春時代。
あたしたちのこれからもずっと続くストーリーはここから始まっていたんだ。

〜続〜

第2話

「ただいまぁ～」

家のドアを開けると、ゲームをしている音が聞こえてきた。
あたしはその音のする部屋に向かうと、次はクッキーの匂いがした。

「ちょっと楓(ふう)！あんたゲームの音でかすぎ！」
「あーもーうるせぇなぁ、わかったって！」

2歳年下の弟、楓雅(ふうが)はそう言いながらリモコンを手にする。
お母さんはパタパタとスリッパの音を立ててクッキーの乗った皿を机に置いた。

「美術部は終わるの早いね。」
「あぁ、今は〆切終わったばっかで、次の展覧会までは日があるから。」
「そっか。じゃあちゃんと勉強するのよ。また全国模試があるんでしょう。」
「あ、うん。わかってる。」
「小説家になりたいからって、パソコンばっかしないでよ。」
「わかってるって。」

お母さんはいつものようにおやつを作ると仕事に出かけてしまう。
その仕事に行ったあとがあたしの一番幸せな時間だった。

「よし、今日も小説書いちゃおう！」

あたしは自分の部屋にあるパソコンを開いた。
小学校のころから読書感想文でたくさんの賞を貰っていた。
あたしはその頃から文章が大好きでいくつもの小説を書いた。
お母さんは反対はしなかったけど、きっとどこか面白くないんだろう。
あたしが小説家になりたいから小説を応募したいと言ったときは「それはだめだ」と言った。
だからせめて…とあたしはブログで小説を書き始めた。
愛莉も見よう見まねで小説を書いている。
お母さんがいなくてずっと小説が書けるこの時間があたしは大好きだった。

「あ、今日もコメントが来てる！」

あたしの小説は主に推理小説だ。
難しいし、トリックを考えるのにも一苦労だが、その分楽しいものだった。

『え！？これどうなるの！？続きが早く読みたい！』

『このトリックはなかなか思いつかないですね！さすがです。』

『これもう、販売されてもいい出来じゃないですか？応募してみては？』

『→に同感です！！』

いくつものコメントを読んでいるだけで幸せだった。

そんな時だった。

あたしの眼はあるコメントにくぎ付けになった。

『貴方の小説はとても面白いですね。貴方はきっと素晴らしい人ですね。』

そんな何処か意味ありげなコメントはあたしの心を不思議な気分にさせた。

そのコメントの差出人は　見知らぬ人　だった。

「”見知らぬ人”？そんな人、読者に居たっけ…？」

あたしは、読者一覧を開き確かめた。

１００人以上いる読者の中にそんな人は見当たらなかった。

”見知らぬ人”のプロフィールを開くと、至って地味なページが開けた。

愛莉の小説も派手だし、あたしのだってそんなに地味じゃない。

そーゆーのを見てからこのページを見ると地味すぎてコメントしづらいものだ。

その人のブログ一覧を見ると『今日、ブログ始めました！』と書かれていた。

その題名の記事はしょっぱなから、自分の趣味について語っていた。

”見知らぬ人”の趣味はパソコンと音楽鑑賞。
好きなジャンルは「日本ロック」だった。
「何これ…陵とそっくり…」
あたしはその人と友達になってみたかった。
ふと、コメントをする　のボタンをクリックして、無意識のうちに文章を綴っていた。
『コメントありがとうございます。日本ロックが本当に好きなんですね。』
あたしはいつもの自分とは裏腹に丁寧な言葉遣いで、文章を打った。
たった2行のコメントなのに、あたしの気持ちはいつもと違っていた。
その数分後返信が届いた。
『はい。大好きです！では、貴方の好きなジャンルは何ですか？』
『私はＪ－ＰＯＰが好きです。あの明るい感じが好きなんです。』
『へぇ、女子らしいですね。』
あたしは初めて女子らしいと言ってくれた”見知らぬ人”のことを不審に思った。
この人はあたしがＪ－ＰＯＰが好きというだけでそう言った。
だけど、その不信感と同時に嬉しさが体中に広がった。

こんな男女を「女子らしい」と言ってくれるなんて、あたしには幸せすぎる出来事だった。

まだ恋を知らなかった中学生のあたしに始めて咲いた小さな蕾。

その蕾の存在をあたしはまだ気づいていなかった。

続

第3話

「おはよう！」

あたしが教室のドアを思いっきり開けると、いきなり椅子が飛んできた。

「おい千紗！勝負だ！」

椅子を投げてきたのは翔。
さっき飛んできた椅子は廊下の彼方へ消え…たということにしておこう。

「へぇ、上等だ！」
「今日こそはブッ倒してやる！！」

そう言って殴りかかってきたが、あたしはそれをあっさりかわし、鳩尾を蹴り飛ばす。

「おぅっ！」

倒れこんだ翔の背中にもういっちょ　かかと落としを炸裂。
若干引き気味の男子と笑いで腹がよじれそうになっている女子。

「もっと喧嘩強くなれよ！ダセぇなぁ！」

あたしがそう言うと、教室中が笑いに包まれる。
これがいつもの日常ー…

「なぁ、腕相撲しようぜ。」

そう言ってきたのは陵だった。
あたしは昨日の出来事なんてすっからかんに忘れて、その売り言葉を買う。

「いいよ、負けて恥かいても知らないから！」
「…さぁ、それはどーかな？」

お互いに手を握ると翔がその拳に手を置き、大きく息を吸った。

「…よーい、スタートッ！」

お互い右利きなのに腕相撲では左が強いあたしたちは見物になっていた。

クラスメイト全員があたしが勝つと思っていたことであろう。

…まさかのあたしが負けてしまうなんて。

「…え？」
「お前、意外と力ねぇな！」
「…ウソ…あたしが男子に負けるなんて…」

皆が口をあけて、陵を見つめている。
そりゃそーだ。あたしに勝つなんて、地球がひっくり返ってもあり得ないはずなのに。

「嘘…千紗が負けた…？」

和泉が先生から預かったばかりのプリントを落とす。
「あの男より強くて、女子にモテる千紗が…」
「…こんな骨みたいなヤツに負けるなんて…」
愛莉と桃もあまりの衝撃に驚きを隠せない様だった。
でも一番驚いているのはあたし。
絶対負けないと思ってた。てゆーか楽勝で勝つ予定だった。
「へぇ〜…意外とキャラ濃いんじゃね？アイツ。」
陰から見ている雄大はそう口にした。
陵はあたしより喧嘩が強いってことで少しずつ有名になっていった。

その日の帰り道のことだった。
「あぁ、陵？アイツ超面白いよ（（笑」
「へぇ〜、どんな人なの？」
「ん？やけにロック好きで、ちょっとバカにするとすぐキレんの。」
愛莉は陵に興味を持ったのか、あたしに陵のことばかり聞いてきた。
あたしはそれがうれしかった。
何でかはよくわからないけど、陵がみんなに知られてることが嬉しかった。
あの面白さを一生知られずに生きていくなんて勿体ない。

あたしが初めて負けた男子だからこそ、いつも輝いていてほしかった。

「…ねぇ、千紗。」
「ん？何だよ。」
「千紗って意外とモテるよね。」
「え？あぁ、女子には3回ぐらい告られたけど…」
「違うよ。」

愛莉の冷たい声はあたしの心を突き通る。
嫌な予感がした。でもそれは逃れることは出来なくて。

「…あたしね、翔が好きなんだ。」

愛莉はそう小さく告げると、あたしの前を歩き始めた。

あたしはその言葉を聞いてショックだった。
だって、あたしは、翔が好きだったから。

別に今は好きじゃない。
翔はただの友達だし、今はむしろ喧嘩相手といったほうがいいのかもしれない。

だけど、一年前あたしは確かに翔が好きだった。
愛莉に相談した。愛莉は一生懸命応援してくれた。

だけど見事にフラれた。
その理由は「お前は男としてしか見れない。」だった。

それ以来あたしは少しでも女の自分を消したくて男らしくなった。

筋トレして、体作って、兄ちゃんに鍛えてもらった。
女の自分は捨ててしまえ。そうすれば、きっとずっと友達でいられる。
その願いはかなったけど、あたしは女子だという部分を全く見せないことにした。
大好きだった小説もみんな陰でやることにした。
それが自分を守るすべだった。
「…でもね、翔には好きな人がいるの。」
愛莉の声が一段と空に響く。
6月の空は少し曇り気味だった。もうすぐ雨が降りそうな感じ。
「…それが千紗なんだよ。」
振ってるはずのない雨があたしの頭上には降ってきた。
それはきっと心の雨であたしの気持ちが勝手に錯覚させてるんだ。
それは分かってた。
だけど、翔の好きな人があたしだなんて思えなかった。
「今でも翔が好きなら、あたしと絶交して！」
「え！？何でよ！」
「だって、そうでもしないと、あたしー…」
愛莉はそう言いかけて、ハッと気づいたように口を閉ざした。

「…その続きは？」
「…千紗のこと裏切るかもしれないから。」
あたしはふっとため息をつくと愛莉に言った。
「安心してよ。もう好きじゃないし。」
「…本当に？」
「うん。だからそー言ってんじゃん。」
「じゃあ…翔が告白してきても振るんだよね？」
一瞬だけ迷いがよぎったけど、あたしは構わず言った。
「当たり前じゃん。愛莉のこと応援してるよ。」
「ありがとう！千紗！！」
昔の恋だけど、まだあきらめ切れてないのかもしれない。
だけど、今のあたしに必要なのは恋じゃない。
だからあたしは少し胸が痛んだけれど、愛莉の恋を応援することにした。

続

第４話

家に着くと、あたしはいつも以上に疲れていることが分かった。
ドアを開くと聞こえるあのうるさい音も、何だか遠くのもののような気がした。

「ただいま。」

あたしが小さく呟くと、お母さんはキッチンから「おかえり」と返してきた。

いつもならリビングに行って、おやつをつまんで楓をからかう。
だけど、そんな気分にはなれなくて、あたしはそのまま部屋に向かった。

「…愛莉が翔を好きなんて。」

あたしは鞄をドサッと置くと、ベットに寝転んだ。

好きだった人に好かれるなんて、あたしはなんて間の悪い恋愛をしているんだろう。
翔があたしを好きになってくれたのが、１年前だったらよかったのに。

「…人生、そう上手くはいかないよね。」

あたしはこの思いを小説につづりたくて、パソコンを開いた。

小説の続きを書こうとマイページを開くと、またコメントが届いて

いた。

『今日、すごく強い女子に腕相撲で勝ったんです！皆が褒めてくれてうれしかったです。』

そう書かれたコメントを見つけたあたしはすぐさま返信した。

『そうなんですか。すごいですね。私も一度勝負してみたいです。会えますか？』

ネット上の人に会うのは危険だとわかっていた。

だけど、もう止められなかった。

どれだけリアルの生活で悩みがあっても、ネットの中は夢の世界だ。

あたしはその夢の世界の住人、”見知らぬ人”にいつしか恋をしていたのかもしれない。

そのことにあたしはまだ気づいてはいなかったけれど。

その数分後返信が届いた。

『会ってもらえるんですか？ぜひ、お手合わせしたいです。』

あたしはただ嬉しくて、すぐに『じゃあ、○○珈琲カフェで！』と返信した。

見知らぬ人が　どこに住んでいるのかも知らないのに。

『負けても知りませんよ？』

そう付け足してコメントしてみた。
すると返信コメントにはこう書かれていた。

『さぁ？それはどーかな？』

…このフレーズ…どこかで聞いた気がする…

陵【…さぁ、それはどーかな？】

…今日、陵と腕相撲した時だ…！

あたしはガタッと立ち上がり、そのまま座り込んだ。

「見知らぬ人の正体は…陵だった…？」

戸惑いを隠せなくて、あたしはそのまま頭にすべてを巡らせた。

…そしていつしか、あたしはそのまま眠っていた。

…ー翌日

学校はいつものように賑わっていた。
そしていつものように教室のドアを開ける。

「よぉ！千紗！今日は腕相撲で勝負…」
「ごめん。それどころじゃない。」
「え？」

翔を軽くスルーしてあたしはズカズカと陵の席に向かった。

「…なぁ、お前ブログやってるだろ。」
「は、はぁ？何のことだよ。」
「嘘つくな。お前のユーザーネームは”見知らぬ人”。…違うか？」
陵の机に両手を置き、あたしは陵を責めるように問い詰めた。
だけど、どんなに問い詰めても「やってねぇし。」の一点張りだった。

「…別に…言ってくれたっていいじゃん。」
あたしがそうつぶやくと、陵は不思議そうな顔をした。
でもその背後で愛莉があたしに対して、激しい嫉妬を抱いていたことに気付かなかった。
その理由はただ一つ。
翔があたしと陵が仲良いのを見て嫉妬したからだろう。

「ねぇ、千紗！宿題やってきた？」
丁度その空気を打ち壊してくれた和泉はあたしを引っ張って廊下へ連れ出した。
楽しいはずの青春時代。
変わることのなかった、何不自由のない生活。
だけど、これから徐々にあたしたちをドロドロの関係にしていく恋愛の怖さというものは、絶対に逃れられないものだった。

友情？それとも恋？

あたしはどっちを選べばいいのだろうかー…

続

第5話

その日、学校が終わると、あたしは走って家に帰った。
家はまだ暗くて、楓も帰ってきていなかった。

パソコンを開くと、”見知らぬ人”からコメントが届いていた。

『すいません。やっぱり会うのは無理です。』

そのコメントを見たあたしは独り言をつぶやいた。
しかもデカイ声だしキレてるし。

「何よ…それ。あたしにバレたから会えないってわけ…？」

あたし何だかむしゃくしゃしていた。
何でこんなに怒っているのかも、何でこんなに悲しいのかも分からなかった。

コメントを交換し合うようになってもう2週間。
そろそろ心を開いてくれてもいいと思ってた。

「あたしは…貴方が好きなのに。」

そうポツリとつぶやいていた。
ガチャ・・・とドアの開く音がする。

そこには楓が立っていた。

「姉ちゃん、好きなヤツいんの！？兄ちゃんに言わなきゃ！」

「ちょっと楓！やめてよ！」
あたしは無意識のうちの女子っぽい言葉を発していた。
いつもだったら「おい楓！やめろよ！」なのに。
楓が部屋を出ていき、あたしの向かいの部屋にいる兄ちゃんを呼んだ。
「ねぇ、兄ちゃん！姉ちゃん好きな奴いるんだってさ！」
「…マジか千紗！」
ガチャと出てきた兄ちゃんは目を丸くさせて言った。
兄ちゃんは楓とは違って頭が良くて、運動神経も良くて、顔もいい。
お父さん似の楓とお母さん似の兄ちゃんは全くと言っていいほど似ていない。
あたしは丁度お父さんにもお母さんにも似ているんだけど。
「いやぁ～、お前は本当に男女だからな。恋なんてできないと思っていたから安心したよ。」
「…別に恋なんてしてないし。」
「隠さなくってもいいって。母さんにはいわねーから。」
兄ちゃんは陽気にそう答えると、楓を連れてあたしの部屋に入ってきた。
「俺だってさぁ、お前に言ったろ。好きな人のこと。」
「…それは兄ちゃんから勝手に言ってきたんじゃん。」
「だってよぉ、父さんはアメリカ行っていねぇし、母さんは勉強ば

っかだし…」
「で、恋の悩みを相談したのがあたしだったわけね。」
兄ちゃんは顔のとこでピースサインを作ると、「そーゆーこと！」といった。
「こんな兄ちゃんが何でモテるのか…」
「え？だって俺、超かっこいいし。」
…自分で言うか、普通。
あたしはそう思いつつも兄ちゃんに憧れていたりする。
そしてあたしは兄ちゃんにもう1つ隠し事があった。
「あのさぁ、兄ちゃん、絶対怒んないでよ。」
「事によるな。」
「じゃー言わない！」
「分かった、分かった。怒んないって。さっさと言えよ。」
あたしはちょっと躊躇ったけど、今言わなくていつ言うのだ。
椅子から立ち上がってあたしは言った。
「実はいうとさ、桃が兄ちゃんのこと好きなんだよ。」
「…えぇぇぇぇ！？桃ちゃんが！？いやぁ、嬉しいなぁ…」
キモいわ、このクソ兄貴！！
あたしはガタン、といすに腰を下ろすと、兄ちゃんを睨み付けた。
「何で、あたしの親友がこんなクソ兄貴を好いてんのかな。」

「おい、千紗。クソ兄貴は聞き捨てならねぇぞ。」
「だって本当のことじゃん。どこがカッコイイの。」

「あのなー」と兄ちゃんはため息をつく。
あたしはまたパソコンと向き合って、小説を書き始めた。

兄ちゃんと楓は、あたしの部屋を出ていくと、2人でコンビニに行った。
あたしは、2人がいなくなると同時に、ベットに寝転んだ。

「…あたし、やっぱ”見知らぬ人”が好きなんだよ…」

でもあたしは決定的なミスを犯していた。
それは　見知らぬ人＝陵　ということだ。

「ちょっと待ってよ。…もし同一人物だったら…」

あたしはベットからガバッと起き上がり、パソコンの奥を見据えた。

「あたしの好きな人は…陵ってわけ…？」

ネットの向こうの君は一体誰なんですか？

あたしはその疑問を抱えたまま、その日を過ごすこととなったー…

第６話

「今日はテストを返すぞ～」

先生が大きな声でそういうと、クラス中が嫌な空気になる。
まるで「えぇ～」とでも言いたげに。

「あ～、あたし何点だろぉ。」
「とか言っといて、千紗は頭良いからな。」

ぐにゃりと体を曲げるあたしに和泉は言ってきた。
すると雄大も、あたしに声をかけてくる。

「どーせ、千紗は１００点だろーよ。」
「…内心、俺の方が頭良いけどって思ってるだろ。」
「ご名答。今回の期末簡単だったからな。１００点ぐらい当然だ。」
「ふざけんな、がり勉。」

雄大は「フフン」という顔をして、教卓の前に歩いていく。
あたしもそれに続いて、テストを受け取りに行った。

「…おめでとう。１００点だぞ。」

そう言いながら先生はあたしにテストを渡してきた。
そして先生の言うとおり、赤いペンで大きく１００点と書かれていた。

「おぅ、千紗、何点だった？」

和泉が誇らしげに聞いてくる。
あたしはそれをブーメランのように「１００点。」と返した。
あたしの予想では「えぇ～！？１００点！？すごぉい！」だった。
ところがどっこい。

「え！？マジかよ！？あたしも１００点なんだけど！？」
「え！？お前ら２人とも１００点なのかよ、俺もだよ！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

…なんてこった。

あたしは口をぽかーんとあけ、２人を見つめる。
クラスメイトは皆「あ～、７４点だぁ～」とか何とか言ってんのに、
何でこの３人だけ１００点のなのか。
自慢出来やしない。

「…あ、そーだ！陵！お前は！？」

あたしはくるりと後ろを向いて、問いかけた。
陵は一瞬肩を震わせると、そろりと逃げようとした。

「…ちょぉっと待ったぁ。さぁ、何点なの？…りょ～う君？」
「も～、俺とは格の差ってものがありすぎなんだって！！」

あたしは陵の肩を自分の方に引き寄せていった。
陵はまたも顔が赤くなり始めたが、そんなこと気にしている暇はない。

「ん？それはどういう格の差かな？自分の方が上ってことかな？」

「ち、違うって！俺の方が断然下だ…」
陵が気を抜いたすきに、あたしは右手に握られているテストを奪い取る。
「ゲーット！」
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」
パラリとテストを開くと、赤い文字が出てきた。
「…プッ、３８点～～～～～？？」
「だぁ～ッ！声デカイって！」
「お前、こんなんで高校行けんのかよ！！」
「うぅ…」
陵はショボンと肩を落とし、顔を真っ赤にさせながら言った。
そしてふと、あたしは”見知らぬ人”を思い出す。
「どー考えても違うな…」
「…ん？」
「あ、いや、なんでもない。」
陵≠見知らぬ人　っぽいな。
こんなバカで無駄に顔が赤い陵とは違って、”見知らぬ人”はクールだ。
しかも言葉遣いも丁寧だし、話すことも神秘的。
期末３８点の馬鹿者と同一人物なわけがない。

そう考えていた時だった。
陵はまたも”見知らぬ人”を思わせる言動をする。

「そーいや、俺さぁ今度ネットの人と会う予定だったんだ。」
「…えっ！？」
「だけど、都合悪く用事ができちゃってさぁ、神様からの天罰？」
「そ、その人とどこで会う約束してんだ？」
「え～っと、〇〇珈琲カフェだったような気がする…」

あたしは頭の中を金槌で殴られた気分になった。

陵もネットの向こう側にいる人と会う約束をしていた。
しかも、あたしと”見知らぬ人”が会う約束をしていた「〇〇珈琲カフェ」で。

「その人さぁ、めちゃめちゃＴＨＥ☆女の子って感じの子でさぁ。お前と真逆！」
「はぁ！？男らしくて悪かったな！！」

あたしは平気な顔して、陵と下らないことを話し続けた。
だけど、内心、平気なんてものじゃない。

あたしだって、ネットの中では女の子で居たくて、可愛い事言ってるよ。
本当は皆の前でも、ちょっとくらい可愛く居たい。

だけど、恥ずかしくてそんなことできないし、今更…

そう思いかけたとき、あたしはふと思った。

ネットの中のあたしは「ＴＨＥ☆女の子」。
今、陵はネットの向こうの人を「ＴＨＥ☆女の子」といった。

「…ねぇ、陵。」
「ん？どーした。」
「陵ってさぁ、そのネットの向こうの人、好きなの？」
「え！？いや、な、何だよいきなり！」
「別にいいじゃん。その人に聞こえるわけじゃないんだからさ。」

陵はさらに顔を赤くした。
だけど、あたしは目線をそらさず、陵の眼だけを見た。

「…好きだよ、その人のこと。」

陵は静かに言った。
あたしはもう一つ疑問があった。

「なぁ、陵のユーザーネームって何だ？そろそろ教えてくれてもよくね？」
「…え…っと、その…」

お願い、あたしの好きな人だと言わないで。

「み…しらぬ人…」

どうして、あたしはこんなに間の悪い恋愛しかできないんだろうか。

第7話

あたしの好きな人は陵だった。
陵が嫌いなわけじゃないけど、
あのクールでカッコイイ”見知らぬ人”と陵が一緒だと思うと…
…何とも言い切れない気分だ。

「なぁ、俺さ聞きたいことあるんだけど。」
「あ？何だよ。」

陵はまたも顔を赤らめながら、あたしの眼を見て言った。

「お前ってさ…ブログで推理小説書いてたりすんの？」
「へっ！？」

あたしは陵の唐突な質問にびっくりして、自分のテストを落としそうになる。
やっとの思いで持ちこたえると、あたしは陵の方を向いた。

そして、陵が口を開く。

「もしかして、お前…」
「な、何だよ。」
「本当は、可愛いんじゃね？」
「はぁっ…！？」

あたしは陵の言葉に迂闊にもドキッとしてしまった。

鼓動が高鳴る。血が全身に全速力で走ってるみたいに。
”見知らぬ人”のことが好き。
だけど、”見知らぬ人”は陵かもしれない。
でも今、あたしはそれでもいいと思ってる。
…陵に恋をしてしまったから。

「べ、別に可愛くねーから！熱でもあんじゃねぇの！？」
「…素直じゃねーなぁ。」
「す、素直じゃなくて悪かったな！」

あたしはその場から離れたくて、そそくさと席へ戻る。
その時、陵はあたしの肩をくぃっと掴んで赤い顔をして言う。

「お前…」
「な、何？」
「…髪にゴミついてんぞ。」
「……はぁ？」

陵の手があたしの髪に触れる。
心臓が　どくん、どくん、と大きな鼓動を起てる。

どうしよう、好きだって分かった瞬間、ものすごくカッコよく見える！

ちょっと目上の陵は見上げるとカッコよくて、
…いや、そんなにカッコよくもないけど。

細いシュッとした肩も筋肉質で、
…いや、ただ単に細いだけ。

どうしちゃったんだろう、今までこんな風に思ったことなかったのに。
翔のことが好きだったときだって、翔のことカッコイイなんて思ったことなかったし、
なんとなく、一緒に居て好きだなって思っただけだったけど…

陵の顔を見ているだけでドキドキが止まらない。

「…ほら、取れたぞ。」
「え、あ、う、うん。」
「どーした、顔赤いぞ？」
「自分だって赤いくせに何言ってんの。」

あたしは陵の顔をやっとの思いで見ながら、話を続ける。

…どうしよう。あたし”マジ”なんだ。
陵のこと、本気で好きになっちゃったんだ…。

あたしはその小さな恋心を胸に秘め、ドクンドクンと鼓動を起てていた。

続

第8話

おさまらない鼓動はあたしの胸を締め付けた。
陵は「ほら、行くぞ。」とあたしを置いて自分の席へ戻っていった。
あたしも後ろに付いて、自分の席に腰を下ろす。
斜め後ろの陵の席が目の端でうっすら見える角度をキープして前を見る。
すると先生は黒板に白いチョークで四角をたくさん書き始めた。
やけにうるさい教室に、嫌気がさす。
「先生！それって席替えの表ですかぁ？」
誰かが甲高い声で先生に問いかける。
先生はその声に「あぁ。」と答えた。
たった一瞬の出来事だった。
瞬きをするかしないかぐらいの短い時間だった。
あたしと陵を引き離す出来事がとうとうやってきたのだ。
「…え…？」
「うわぁぁぁぁぁぁん！千紗と離れるとか絶対嫌だぁぁぁ！」
和泉があたしの肩にすがりついて言う。
あたしは、その手を取って「あたしもヤダぁぁぁ！」といった。

本当に嫌だ。
離れたくない、雄大とも和泉とも陵とも…。
別にクラスが変わるわけじゃないけど、席が離れたら心まで離れそうになる。
嫌だよ。小学校の時は楽しみでしょうがなかった席替えなのに。
今は離れたくないって心の中で叫んでる。
あぁ、そっか。
桃はこんな気持ちでいつもいたんだね。

〜1年前〜

「あのさ…あたし、翔が好きなんだ。」
「…えぇっ！？」
桃に相談したのは愛莉に相談する一日前。
驚いた様子の桃だったけど、すぐにその表情は冷めていった。
「そっか。まぁ、なんとなくは分かってたけどね。」
「え！そーなんだ。」
あたしの言葉が少し残ると、それをかき消すように桃が言う。
「じゃあ、あたしの恋も応援してくれるかなぁ？」
「え！？ぜ、全然いいけど、桃好きな人いるの！？」
「うん。」
「えぇ！？誰、誰！？同クラ！？」
「…違うよ。」

桃の高めの透き通る声。
ひんやりと冷たい風が通るこの季節は、桃の声をさらに惹き立てた。
「あたしね…千紗のお兄ちゃんが好きなの。」
「え…？」
やけに風が冷たく感じる。
さっきまで遠くにあった夕日も今は自分のバックで染まっている。
どっかの映画のワンシーンみたいなこの情景はあたしの心に刻まれる。
「お兄ちゃんが…好きなんだ？」
「うん…。」
「…うっそぉ！？桃、そんな趣味だったの！？全然応援するよ！」
「ほ、本当に？」
「うん！もっちろん！」
マジでお兄ちゃんのことを好きっていうなんて正直びっくりだった。
だけど、桃のことを好いてくれているお兄ちゃんならいいかな、とか思ってた。
お兄ちゃんの桃に関する感情はどういう意味なのかは解らなかったけど。
そのまま家に帰って私はリビングに駆けていった。
「ねぇっ、お兄ちゃ…」

そう言いかけた時、お母さんが体を丸めて泣いているところが見えた。
お父さんはただお兄ちゃんに向かって頭を下げていた。
「…どうした…の…？」
あたしは小さな声でお母さんに問いかけた。
でも何の答えもなく、ただ泣いているだけだった。
「千紗、落ち着いて聞くんだぞ。」
「何…お父さん…」
しばらくしてお父さんは口を開く。
「引っ越す、ことになった…」
「ど、どうして…っ！？」
あたしの質問には耳も傾けず、お兄ちゃんは言う。
「いいんだよ、父さん。千紗には俺から話しておくから。」
「楓には…まだ言うなよ。」
「分かってるよ、楓に言っても理解できるか分かんないけどな。」
お兄ちゃんはあたしの手をつかんで、2階へと駆け上っていった。
そして、バタンとドアを閉めるとお兄ちゃんはきりだした。
「…父さんの会社が倒産したんだ。でも父さんは優秀な資格を持ってるから
どこででも仕事はできる。だからな、失業の恐れのないアメリカに行くことになったんだ。

だけどな…もう一つ言わなきゃいけないことがある。」
「な、何…？」

アメリカ…？それだけでも十分嫌な話だよ。
皆と離れたくないよ。外国に行ったら皆ともう会えないじゃん。

「俺の臓器を移植することになったんだ。…アメリカの方に。」
「え…！？」
「だから半分そのためにアメリカに行くんだ。」
「う、そ、でしょ…？」
「しかも大手術だそうだ。失敗したらその患者だけでなく俺も助からないかもしれない。」
「…い、いやだよ！どうしてそんな危険を冒してまで他人を助けるの！？」
「俺は困ってる人を見捨ててまで生きたいなんて思わない。俺自身の考えだ。」

あたしはお兄ちゃんのTシャツを握りしめた。
泣きながらお兄ちゃんにすがっても、お兄ちゃんはあたしの頭を撫でるだけだった。

それから何日か経った。
桃はお兄ちゃんの現状を知って、あたしの家に毎日訪れた。

「千紗兄ぃ！英語教えて！」
「おぉいいぞ。へぇ、もうこんな難しいのやってるのか。」
「そ、そんなことないよ。」

桃はお兄ちゃんといる時はいつも幸せそうだった。
あたしは何だか微笑ましかったし、ずっと続いてほしいと思ってた。

だけど、一刻一刻と迫るお兄ちゃんのタイムリミットには逆らえなかった。

「…じゃあ、行ってくる。」
「元気でね、お兄ちゃん、お父さん。」
「たまにしか帰ってこれないかもしれないけど、我慢してくれよ。」

お父さんは腰をかがめてあたしの顔を見ながら言った。
お兄ちゃんは遠くの方で桃と話していた。

「じゃあな、桃ちゃん。」
「うん。絶対に帰って来てね。あのね、千紗兄ぃ…」
「ん？何だ？お土産かぁ？」

桃の目にはうっすらと涙がたまる。
だけど、桃は何も言わなかった。もう一度、顔をあげてお兄ちゃんに向かって微笑む。

「…ううん。生きて帰ってきたときに言うよ。」
「不吉なこと言うなよ…。安心しろ、帰ってくるからさ。」

お兄ちゃんは桃の頭をそぅっと撫でた。
桃の涙はとうとう溢れ出して、お兄ちゃんの手を振りきって駆けていった。

そして現在ー…。

お兄ちゃんは帰ってきたのだ。
だけど、桃は「会わない。」といった。

お兄ちゃんの手術は成功した。たくさんのお金を持ってお兄ちゃんは帰ってきた。

桃は1年間ずっと、お兄ちゃんのことを思い続けていた。
だけど、お兄ちゃんはそんな桃とは裏腹に、たくさんの女子に手を出していたのだ。

それが桃にとってどれだけ辛い事だろう。

あたしの席替えなんかに比べたら、桃は一年間も好きな人に会えなかったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7693z/

ネットの向こうのキミへ

2012年1月14日22時49分発行